
IV 医学部看護学科

1 教育・研究の理念・目標等

1. 教育・研究の理念と目標

近年の医療・福祉を取り巻く環境の変化に対応し、多様な社会的要請に応えるため、21世紀の医療に向けて、豊かな感性と人間性を備え、日々進歩する知識や技術を修得・発展させる能力や、地域に即した保健医療活動の中心的役割を果たすことのできる資質の高い看護職を育成する。

- ① 人権と命に対する尊厳と、豊かな感性と倫理観を身につけた人格の形成
- ② 総合的な人間理解の能力の育成
- ③ 自主性かつ創造力を持ち、主体的に判断・実践ができる問題解決能力の育成
- ④ 看護専門職として、科学的知識・技術を修得し、それを探求していくことができる能力の育成
- ⑤ 看護の役割を認識し、ケアチームの一員として活躍できる能力の育成

2. 教育・研究の活性化と充実の経過

急速な少子・高齢化による人口構成の変化、疾病構造の変化、また人々の健康への関心の高まりなどにより、医療を取り巻く社会環境は著しく変貌してきている。慢性疾患や老化による障害を抱えて生活する人々が増加するにつれ、療養生活の質、生命の尊厳の本質が改めて問い直されるようになった。このように拡大し複雑化する社会的ニーズに応えていける看護者を育成するには、豊かな感性と深い倫理観に裏付けられた人間性、専門的知識・技術と実践力を備え、問題解決能力を身につけることが課題となる。

このため1年次生から医療・看護への関心を高めるため、初期体験実習や総合科目（医療と生命）、医学概論など医学科学生との合同授業を開講している。また、専門教育の基盤となる教養教育は1,2年次に全学部生を対象とした全学共通教育を受講する。

問題解決能力、主体的に学習する能力育成のために1年次からテュートリアル教育に基づいた少人数教育を実施している。平成17年3月にはじめての卒業生を輩出したが、その結果を踏まえ、さらに実践能力を基盤とした専門教育を実施していく。

3. 教育・研究の将来構想

(1) 基本理念

わが国における医療・福祉の状況は、近年大きく変化している。医学の進歩と医学を取り巻く諸科学の発展、さらに急速な高齢化などの社会環境の変化に伴い、医療の世界も多様化し、治療とともに援助サービスが重視されるようになってきた。医療における看護の役割は、今後さらに拡大・複雑化していくことは明らかであり、豊かな感性と人間性を備えた資質の高い看護職の育成が不可欠となる。

これらの社会的要請に応えるため、日々進歩する医療の知識・技術に対応し、さらに発展させる能力を持った人材、地域の実情に即したきめ細やかな保健医療活動の中心的役割を果たせる人材を養成するとともに、看護教育及び研究・研修の拠点となり、生涯学習に貢献することのできる、社会に開かれた看護学科を目指すことを基本理念とする。

(2) 教育体制

21世紀の医療は、治療水準の向上とともに、あらゆる健康レベルの人々を対象とした、保健・医療・福祉が連携した良質できめ細やかな援助サービスが要請される。医療における看護の責任は今後ますます重く、社会の要請に応えるため、次のような人材の育成と学問的基盤の確立を目標とする。

- ① 全人的医療を担い得る豊かな感性と人間性を備えた人材
- ② 高度医療の一環を担い得る資質の高い人材
- ③ 保健・医療活動に指導的役割を果たせる人材
- ④ 看護学における学問的基盤を確立できる人材
- ⑤ 広い視野を持ち、国内外で活躍できる人材

医学部医学科との緊密な協力体制を築き、総合大学としてのメリットを十分に生かした教育・研究を行っていく。「健康」を視座にすえた統合カリキュラムで育った問題解決能力や判断能力、応用能力のある人材の育成により、地域で保健医療に係わる人々とともにケアチームを作り、生涯学習を続けていける体制整備を目指す。

(3) 研究体制

看護学の研究は、関連諸科学との連携、特に保健・医療分野との共同研究は必須である。臨床、地域における看護職との研究は看護の研究の本質的意義を有するものであり、各講座、分野の特色の中で推進していく。看護の対象や役割の拡大により、健康支援や生活への援助から、教育・福祉・経済・情報などと連携していく必要性が高まっている。学内外において関連する学問分野、他の専門職との連携を密にし、学際的かつ効率的な共同研究を推進していく。また、大学院修士課程（看護学専攻）の開設により、より高い専門性を追及した教育・研究の充実を図っていく。

2 教育活動

1. 学生の受入れ

(1) 学生募集の方法

- ① 学生募集要項及び入学者選抜に関する要項については、学務部から全学一括で県下高等学校を中心に郵送配布するとともに、希望者に対しては学務第二係から直接又は郵送で配布している。
- ② 看護学科紹介パンフレット「岐阜大学医学部看護学科案内」を作成し、大学紹介（オープンキャンパス）参加者に配布している。
- ③ 大学紹介（オープンキャンパス）において、看護学科長の概要説明並びに各講座の模擬実習等を実施するとともに、より効果的な紹介とするため、参加者からアンケートをとって教務厚生委員会看護学科委員会における計画立案の参考としている。
- ④ 看護学科全教員が岐阜県を中心に高等学校を訪問し、看護学科紹介及び進路指導担当の先生と情報交換を実施している。
- ⑤ 私塾主催の入試説明会に教員を派遣することや、高等学校に対する「出前講義」を行うなど、積極的に取り組んでいる。

(2) 入学者選抜の方法と方針

看護学生として望ましい学生を入学させることに加え、応募者数の増加を目的に入試科目の見直しを実施した。このことによって、平成18年度募集からは文系からも理系からも受験しやすいように、科目を選択できる方法に変更した。

また、入試方法と在校生の成績との関係については、部分的な検討は実施しているが全体的な検討をさらに行う予定である。

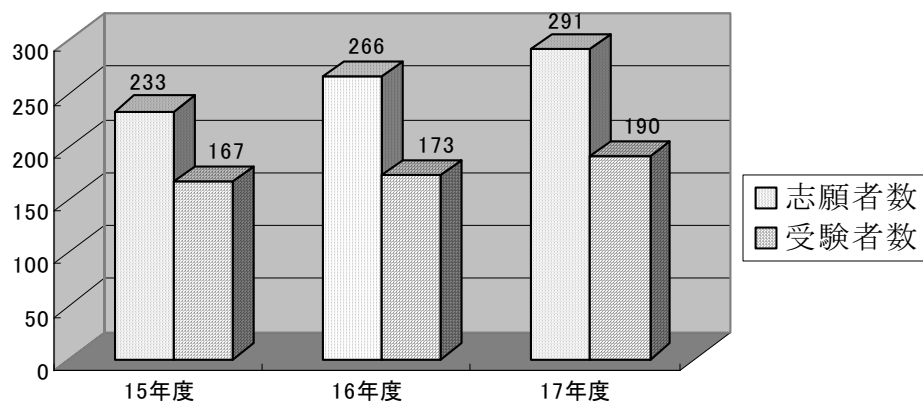
3年次編入学試験については毎年10名を受け入れている。

(3) 学生の受入れ状況

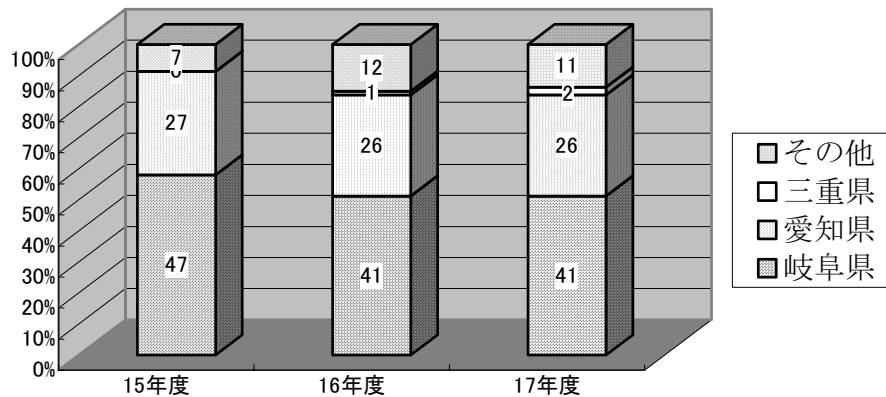
学生定員充足状況：平成15年度から17年度までの3年間の入学（志願者・入学者）に関する状況は次表のとおりである。

区分		志願者数	受験者数	入学者	県別内訳			
					岐阜県	愛知県	三重県	その他
平成15年度	男	13	13	5	2	2		1
	女	220	154	76	45	25		6
	計	233	167	81	47	27		7
平成16年度	男	19	10	5	1	3		1
	女	247	163	75	40	23	1	11
	計	266	173	80	41	26	1	12
平成17年度	男	27	17	11	7	2		2
	女	264	173	69	34	24	2	9
	計	291	190	80	41	26	2	11

年度別志願者・受験者状況



入学者出身県別内訳



(4) 編入学制度と実態

看護学科では、すでに看護に関する学科あるいは課程において学習してきた学生を対象に、編入学（第3年次）による学生の受け入れ制度を設けている。

平成15年度～平成17年度の編入学（志願者・入学者）に関する状況は次表のとおりである。

区分		志願者数	受験者数	入学者
平成15年度	男	1	1	0
	女	66	56	10
	計	67	57	10
平成16年度	男	1	0	0
	女	61	52	10
	計	62	52	10
平成17年度	男	3	2	2
	女	58	47	8
	計	61	49	10

(5) 研究生の受入れと実態

学則において研究生の受け入れ制度を設けている。

平成16年度にブラジルから県費の研究生1名を受け入れた。

2. カリキュラム

(1) カリキュラムの編成方針

カリキュラムの基本的な編成方針は次のような視点に立っている。

- ① 教養教育と専門教育の有機的連携によって、「健康」を視座とした統合カリキュラムを導入している。
- ② カリキュラムの編成にあたっては、「看護」は「人間」と「健康」及び「環境」に関わる実践活動ととらえ、他の医療従事者と協調して看護実践を行う能力を育成するための科目を設置する。

- ③ 豊かな人間性と幅広い知識を持った人材を育成するために、地域科学部及び教育学部の開講科目を積極的に取り入れ、幅広い専門教育を実施する。
- ④ 医療が高度化、複雑化する中で、医療人として社会のニーズに応えていくためには、豊かな感性と深い倫理観に裏付けられた人間性を培い、専門的知識・技術と実践力を備え、医療・福祉・保健が連携した良質できめ細かな援助サービスを提供し、チーム医療等における認識・知識を深めることが重要であることから、医学科との合同講義、合同実習を取り入れ、全人的医療、総合的医療を担うための人材を育成する。
- ⑤ 多様な価値観が存在する社会、刻々と変化する社会で生活する人々に柔軟に対応し、地域、在宅ケアを実践していくことができるよう、テュートリアル教育を基本に、主体的に学習する能力、統合能力、対人技能、批判的思考などが修得できるようにする。
- ⑥ あらゆる健康レベルの人々へ一貫した看護が展開できるように、実習の場として、先端医療を提供する附属病院での実習をはじめとして、在宅を含め、地域と密着した医療施設や保健施設等での保健・医療・福祉の統合を図った実習を行う。

(2) 教育活動の実施内容と方法

岐阜大学医学部看護学科は、資質の高い看護職の育成をめざし、「人間」、「健康」、「環境」、「看護」という4つの看護の構成概念に沿って編成されたカリキュラムを展開している。大学全体の2期 Semester制導入に伴い、カリキュラムの一部改正を行いながら平成17年3月に始めて卒業生を輩出した。授業の実施に当たっては、コンピュータ、ビデオなどの教育機器を積極的に活用するとともに、学生の自主的利用を推進し、教育の効率化を考慮している。学内の演習では、できるだけ個々の学生が一つ一つの技術を体験できるよう配慮して進められている。「生活行動からみる身体」では、テュートリアル教育を導入し、「成人・老年事例展開」では、テュートリアル教育を基盤とした主体的学習方法を取り入れている。また、実習についてはそれぞれの実習の評価を踏まえ、臨地実習施設との綿密な協議を実施するなど、効果的な学習が継続できるよう考慮している。

(3) 課題と展望

厚生労働省の「看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会」の報告では、学習途上にある学生が行う看護技術実習の範囲や機会が限定されていること、身体への侵襲性が高い看護技術については、臨地実習の際に、学生が実施できる機会が少なくなっていること、そして、卒業直後の看護師の技術能力と臨床現場が期待している能力との間の乖離が大きくなっていること等があげられている。また、「新たな看護のあり方に関する検討会」の報告でも、看護師として学ぶべき知識・技術の増大とあわせて、看護師の資質の向上が求められていることから、看護基礎教育の内容の充実等が望まれている。岐阜大学医学部看護学科のカリキュラムにおいても、少子高齢化の進展、医療技術の進歩、国民の意識の変化、看護教育水準の向上など時代の要請に応じて、教育内容、教授方法について検討をし、平成18年度から新しいカリキュラムを実施する予定でいる。

3. 教育方針

(1) 教育改革

看護学科は平成 16 年度に完成年次となるので、カリキュラム委員会による検討を基に、平成 18 年度の教育課程から大きな改正を行った。カリキュラム改正にあたっては、4 年間の教育実績を踏まえ以下の改正を行った。①看護学の基礎的教育を基に将来を見据えた専門分野を発展的に学習する目的で「発展看護学」を設置した。この発展看護学は、研究方法論、卒業研究、国際看護事情などの授業科目で構成されている。②従来の専門科目を見直し、不足する授業科目を新設し、専門科目の充実を図る。③教養科目の充実のために、取得単位数を増加する。

今後、看護学教育においては、保健師と看護師との 2 つの教育課程に加え、選択ではあるが助産師の授業科目もあり、卒業には非常に多くの取得単位数を必要としているといった問題がある。全国的には少数であるが、助産師教育を大学院修士課程、専門職大学院、大学の専攻科などで行う大学も出てきている。本看護学科においても、助産師の授業科目に関して、教育上望ましい位置づけについて、今後検討する必要がある。

(2) 全学共通教育

大学では、専門について深く学ぶとともに、教養を学ぶことが必要である。この目的を達成するため、4 年一貫教育体制のもとに、教養教育と専門教育を並行して行っている。教養科目については、全学体制のもとに全学共通教育として進められている。

○全学共通教育の最低修得単位数

科 目 区 分		卒業要件修得単位数	
教 養 セ ミ ナ ー		2 単位	
ジャンル別科目	人文科学系科目	2 単位以上	計 12 単位
	社会科学系科目	2 単位以上	
	自然科学系科目	2 単位以上	
	総 合 科 目	4 単位以上	
	スポーツ・健康科学	2 単位以上	
外 国 語 演 習		6 単位	
合 計		20 単位	

○全学共通教育の開講時間枠

1 年次前学期

曜日 時限	1	2	3	4	5
月	◎	◎	◎	◎	◎
火	◎	◎	◎	◎	◎
水	◎	◎			
木					
金					

1 年次後学期

曜日 時限	1	2	3	4	5
月	◎	◎	◎	◎	◎
火	◎	◎	◎	◎	◎
水	◎	◎			
木					
金					

◎ : 全学共通教育の開講時間枠

空白 : 専門教育の開講枠

(3) 専門教育（テュートリアル教育・臨床実習）

① テュートリアル教育

専門教育の3講座で1グループ10人の8グループでテュートリアル教育を実施している。

基礎看護学では、「生活行動から見る身体」を1年次後期・2年次前期，成人・老年看護学では「成人・老年事例展開」を2年次後期・3年次前期に授業科目ごとに提示された事例について主体的に学習を進めている。地域・精神看護学では「地域における健康問題と援助」を4年次前期・後期に開講予定である。看護学科は，平成15年3月に総合研究棟が完成し，セミナー室が確保されたことから学習環境が整備されつつあるが，教材や図書，コンピュータなどの充実が今後の課題である。

② 臨地看護学実習

看護学科のカリキュラムでは，卒業要件単位数（124単位以上）のうち約20%が臨地実習の必修単位数（25単位）である。専門教育である臨地実習は，1年次から4年次にわたって配置されており，その位置づけは大きく重要な科目である。そこで看護学科では，資質の高い看護職を育成する上で欠かすことのできない臨地実習の教育効果をあげるために，平成14年から実習委員会を設置し，これまでに次のような活動を行ってきた。

- ・ 臨地実習協議会の設置と開催
- ・ 臨地実習指導者会議の設置と開催
- ・ 臨地実習要項の作成
- ・ 年度毎の臨地実習計画表の作成及び医学科，臨地実習施設との調整
- ・ 臨地実習に伴う感染予防対策の実施要領の作成と実施
- ・ 看護学科における臨地実習時の事故発生対処マニュアルの作成
- ・ 臨地実習場の実習環境の調査の実施
- ・ 臨地実習に伴う予算に関する検討
- ・ 岐阜大学医学部附属病院の建物新営に伴う看護学科学生更衣室学生個別相談室設置の検討と実施
- ・ 岐阜大学医学部附属病院の電子カルテシステムに対応した実習マニュアルの作成
- ・ 個人情報保護に対応した「看護学生の実習に対する協力お願い同意書」の作成

さらに現在は，個人情報保護法の施行後に見えてきた問題について検討を重ねており，臨地実習における個人情報の取り扱いについての文書化を行っている。

近年の医療・福祉を取り巻く環境の変化に対応し，多様な社会的要請に応えるため，豊かな感性と人間性を備えた看護実践能力の高い人材育成に向けての教育方法，教育内容を検討していくことが引き続き今後の課題である。

(4) 他大学における授業科目の履修方針と状況

学則第59条の規定「教育上有益と認めるときは，他の大学又は短期大学との協議に基づき，学生に当該他大学等の授業科目を履修させることができる。」とあるが，専門科目についての実績はない。

(5) 在籍, 留年, 休学, 退学の状況

過去2年間の状況は次表のとおりである。

区 分	在 籍	留 年	休 学	退学 (除籍を含む。)
平成 15 年度	250	2	3	1
平成 16 年度	339	3	1	2

(6) 教育施設・設備の現状

区 分	面 積	用 途	設 備
本館 1 階 講義室 1	134 m ²	講 義	ビデオ投影装置, マイク設備, スライドプロジェクター, 資料提示装置
本館 3 階 講義室 2	105 m ²	〃	ビデオ投影装置, マイク設備, スライドプロジェクター, 資料提示装置
本館 3 階 講義室 3	111 m ²	〃	ビデオ投影装置, マイク設備, スライドプロジェクター, 資料提示装置
本館 5 階 講義室 4	68 m ²	〃	
新棟 1 階 セミナー室	9 室 26 m ² ~ 47 m ²	テュトリアル教育 初期体験実習	
新棟 3 階 大学院講義室 2・3	2 室 23 m ² ~ 24 m ²	講 義	
新棟 3 階 大学院生研究室	2 室 23 m ² ~ 24 m ²	研 究	
本館 2 階 基礎看護実習室 1	258 m ²	基礎看護実習	ビデオ投影装置, マイク設備, 資料提示装置, ガス乾燥機
本館 2 階 老年在宅実習室	92 m ²	老年在宅実習	
新棟 2 階 成人看護実習室 1	23 m ²	成人看護実習	
新棟 2 階 成人看護実習室 2	106 m ²	成人看護実習	
新棟 2 階 成人看護実習室 3	26 m ²	成人看護実習	
新棟 2 階 基礎看護実習室 2	47 m ²	基礎看護実習	ビデオ投影装置, マイク設備, 資料提示装置
新棟 3 階 地域看護実習室	94 m ²	地域看護実習	
新棟 3 階 精神看護実習室 1	53 m ²	精神看護実習	
新棟 3 階 精神看護実習室 2	26 m ²	精神看護実習	
本館 4 階 理化学実習室	90 m ²	理化学実習	
本館 4 階 大学院講義室 1	90 m ²	講 義	
新棟 4 階 母性・小児看護実習室 1	147 m ²	母性・小児看護実習	
新棟 4 階 母性・小児看護実習室 2	26 m ²	母性・小児看護実習	
新棟 4 階 助産学実習室	93 m ²	助産学実習	

(7) 成績の評価, 認定の基準

成績は, 試験等の結果を総合して以下の区分で評価する。

優 (100 点~ 80 点) 合格

良 (79 点~ 70 点) 合格

可 (69 点~ 60 点) 合格

不可 (60 点未満) 不合格

病気その他正当な理由により定期試験を受けられなかった者について、願い出により追試験を受けることができる。定期試験及び追試験に不合格となった者について、1回に限り再試験を受けることができる。

(8) 看護師等国家試験合格状況

平成16年度卒業生の合格状況は次表のとおりである。

区分	受験者	合格者	合格率	全国合格率
保健師	86	82	95.3	81.5
助産師	12	12	100	99.7
看護師	76	76	100	91.4

4. 学生生活への配慮

(1) 奨学金の種類と採択状況

過去2年間のデータは次表のとおりである。

区 分	日本学生支援機構				その他の奨学金	
	第1種		きぼう21			
	申請者数	採用者数	申請者数	採用者数	申請者数	採用者数
平成15年度	15	10	7	7	1	1
平成16年度	14	11	12	12	1	1

(2) 授業料の免除の状況

過去2年間の状況は次表のとおりである。

区 分	在籍者数	前学期			後学期		
		申請	免除		申請	免除	
			全額	半額		全額	半額
平成15年度	250	16	0	10	16	0	12
平成16年度	339	21	18	1	30	21	1

(3) 学生生活相談の体制と実態

学生の個人的な生活に関する相談については、学務第二係が窓口として対応している。

個人的相談については定められた担当教員が応じ、講座レベルでの指導事項などについては当該講座の教員により対応し、総合的には教務厚生委員会看護学科委員会において対応している。

(4) 課外活動の実態

看護学科で許可している学生団体は存在しないが、岐阜大学大学教育委員会の認める体育系及び文科系サークル、また岐阜大学医学部教務厚生委員会の認める医学部体育系及び文科系サークルに所属し活動する学生は少なくない。

キャンパスライフが有意義で、健全なものとなるように課外活動を行う学生数の実態は次表のとおりで学年進行とともに増加している。

区 分	全学サークル		医学部サークル	
	体育系	文化系	体育系	文化系
平成 15 年度	—	—	3 (2)	0
平成 16 年度	21	12	11 (7)	2

※ 1 各年度の4月1日付けの部員数であり、新入部員数は含まない。

2 () 内は、奥穂高岳診療所クラブ部員数(外数)で、7月時点での部員数である。

5. 研究活動

〔基礎看護学講座〕

(1) 基礎看護学分野

1. 研究の概要

- 1) 看護サービスの質に関して実証研究を行い、経済学的分析を通して看護サービスの質向上への政策決定と人材育成に関する研究を進めている。
- 2) 看護技術教育や看護労働の視点から、看護師の熟練形成のキャリアに影響するインセンティブ・システムの構築に関する研究に取り組んでいる。
- 3) 近代看護の基礎を築いたナイチンゲールの人生、看護に対する思想、業績などから、看護師としての看護姿勢の追求を研究している。
- 4) 看護職の継続教育に関する歴史的研究と在宅における感染管理に関する教育プログラムの開発をテーマに研究に取り組んでいる。
- 5) 専門職のための対人コミュニケーション・スキル学習支援システムの開発に取り組んでいる。第一段階として、コンピュータ利用のシミュレーション学習による看護者のコミュニケーション傾向を診断するプログラムを開発した。診断プログラムに続く矯正プログラムを現在開発中である。
- 6) 看護系研究分野においてはこれまでと同様、ナイチンゲールに関する看護及び看護観・倫理観・道徳観・宗教観を含めた人物の研究、並びに看護の総論等の研究を行っている。また、英文学ではヴィクトリア朝時代を中心に Charles Dickens, Thomas Hardy, Jane Austen, E.M. Forster などの作品研究を行っている。
- 7) 高齢者の終末期ケアの質の評価やケアマネジメントに関する研究、介護保険前後の政策評価の一環としての要介護者・介護者をめぐる状況のコホート研究、高齢者の終末期をめぐる自己決定や虐待などの倫理に関する研究を主に行っている。
- 8) 看護師の倫理的感受性に関する研究を行っている。
- 9) 疾患により、生活習慣の変容を必要とされる患者の心理状態を明らかにするとともに、患者から求められる看護援助に関する研究をおこなっている。
- 10) 看護学生の学内と臨地実習での看護技術習得状況についての現状を把握し、実践能力育成にむけた効果的な教育方法を検討している。
- 11) 看護技術の中で、清潔の援助に焦点をあてて対象者への生体負担の軽減に関する研究を行っている。

2. 名簿

教授：	大津廣子	Hiroko Otsu
教授：	滝内隆子	Takako Takiuti
教授：	村中陽子	Yoko Muranaka
助教授：	瀬戸崎康子	Yasuko Setozaki
助教授：	樋口京子	Kyoko Higuchi
講師：	足立みゆき	Miyuki Adachi
助手：	渡邊亜紀子	Akiko Watanabe
助手：	金若美幸	Miyuki kanewaka

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 大津廣子．根拠のある看護技術を実施するには：大津廣子・三好さち子・望月章子編．Evidence 基礎看護技術Ⅰ―自立に向けての生活援助技術―，岐阜：みらい；2003年：9-11.
- 2) 大津廣子．運動を促す援助技術：大津廣子・三好さち子・望月章子編．Evidence 基礎看護技術Ⅰ―自立に向けての生活援助技術―，岐阜：みらい；2003年：91-115.
- 3) 大津廣子．訪問看護サービス実施時に迷ったヘルパーの行動分析：下野恵子・大日康史・大津廣子編．介護サービスの経済分析，東京：東洋経済新報社；2003年：114-121.
- 4) 大津廣子．介護サービスの質向上への取り組みに関する分析：下野恵子・大日康史・大津廣子編．介護サービスの経済分析，東京：東洋経済新報社；2003年：122-143.
- 5) 樋口京子．身体清潔を促す援助技術：岡本恵里，大津廣子・三好さち子・望月章子編．Evidence 基礎看護技術Ⅰ―日常生活の自立に向けての援助技術―，岐阜：みらい；2003年：117-138.

- 6) 足立みゆき. 看護技術の実施と意思決定 2-コミュニケーション: 大津廣子・三好さち子・望月章子編. Evidence 基礎看護技術Ⅰ-自立に向けての生活援助技術一, 岐阜: みらい; 2003年: 18-25
- 7) 大津廣子. 身体アセスメント技術: 大津廣子・三好さち子・望月章子編. Evidence 基礎看護技術Ⅰ-診療に伴う援助技術一, 岐阜: みらい; 2004年: 31-56.
- 8) 大津廣子. 七月十八日の別れ: 道廣睦子・橋本和子・谷田恵美子・古城幸子編. 「看護専門職の人生を育むもの」シリーズ-看護専門職の死生観一, 岡山, 西日本法規出版; 2004年: 36-38.
- 9) 大津廣子. 教えるとは: 古城幸子・道廣睦子・谷口敏代・橋本和子・谷田恵美子編. 「看護専門職の人生を育むもの」シリーズ-ターニングポイント一, 岡山, 西日本法規出版; 2004年: 103-105.
- 10) 樋口京子, 足立みゆき, 渡邊亜紀子. 吸入・吸引の技術: 大津廣子・三好さち子・望月章子編. Evidence 基礎看護技術Ⅱ-診療の援助技術一, 岐阜: みらい; 2004年: 89-110
- 11) 宮田和明, 近藤克則, 樋口京子. 「死亡場所と『介護者の満足度』に関連する要因」: 在宅高齢者の終末期ケア-全国訪問看護ステーション調査から学ぶ一, 東京: 中央法規出版, 2004年: 27-49.
- 12) 宮田和明, 近藤克則, 樋口京子. 「『介護者の満足度』に関連する要因」: 在宅高齢者の終末期ケア-全国訪問看護ステーション調査から学ぶ一, 東京: 中央法規出版, 2004年: 98-135.
- 13) 宮田和明, 近藤克則, 樋口京子. 「看取り直後の『介護者の満足度』を構成する要素」: 在宅高齢者の終末期ケア-全国訪問看護ステーション調査から学ぶ一, 東京: 中央法規出版, 2004年: 150-168.
- 14) 宮田和明, 近藤克則, 樋口京子. 死別後の介護者の『思い』の視点から求められる終末期ケア」: 在宅高齢者の終末期ケア-全国訪問看護ステーション調査から学ぶ一, 東京: 中央法規出版, 2004年: 200-218.
- 15) 足立みゆき. 2人の祖母を亡くし、改めて見えてきた生と死: 古城幸子・橋本和子・道廣睦子・谷田恵美子・谷口敏代編. 「看護専門職の人生を育むもの」シリーズ-看護専門職の死生観一, 岡山, 西日本法規出版; 2004年: 4-6.
- 16) 足立みゆき. 立ち止まってみえてきたもの: 古城幸子・橋本和子・道廣睦子・谷田恵美子・谷口敏代編. 「看護専門職の人生を育むもの」シリーズ-ターニングポイント一, 岡山, 西日本法規出版; 2004年: 36-38.
- 17) 渡邊亜紀子. あんたの笑顔なんてみたくない: 古城幸子・橋本和子・道廣睦子・谷田恵美子・谷口敏代編. 「看護専門職の人生を育むもの」シリーズ-ターニングポイント一, 岡山, 西日本法規出版, 2004年, 78-80.
- 18) 樋口京子, シスター・カリスト・ロイ. 適応モデル: 看護実践に生かす看護理論 19, 東京: 医学芸術社; 2005年: 150-168.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

- 1) 大津廣子, 介護サービスの質向上への提言, 名古屋市立大学大学院経済学研究所・附属経済研究所 2003年; 第8回公開シンポジウム: 18-22.
- 2) 本郷澄子, 近藤克則, 樋口京子他. 在宅高齢者のターミナルケアにおいて介護者が求めている支援-ご遺族を対象とした調査一, ターミナルケア 2003年; 13巻: 404-411.
- 3) 大津廣子. 訪問介護・訪問入浴介護サービス事業所の現状と課題, 月刊マーク 2004年; 15巻: 10-13.
- 4) 加藤悦子, 近藤克則, 樋口京子. 虐待が疑われた高齢者の状況改善に関連する要因-介護保険制度導入前後の変化一, 老年社会科学誌 2004年; 25巻: 482-497.
- 5) 樋口京子, 久世淳子, 森扶由彦他. 在宅療養高齢者の終末期ケアにおける「介護者の満足度」の構造, 日本在宅ケア学会誌 2004年; 7巻2号: 91-99.
- 6) 樋口京子. ヘンダーソンの看護論と看護過程の展開, プチナース 2005年; 14巻増刊7号: 17-51.

総説 (欧文)

- 1) Setozaki, Y. Reconsideration of Current Nursing through the Nursing Philosophy of Florence Nightingale. Acta Sch Med Univ Gifu. 2003;51:249-252.

原著 (和文)

- 1) 三好さち子, 大津廣子, 望月章子, 浅井優子他3名. 看護師に必要な臨床判断能力に関する研究-体位変換実施時の意思決定プロセス一, 人間と科学 2004年; 3巻: 27-35.
- 2) 大津廣子. 介護サービスの質向上への取り組みに関する分析, 国際地域経済研究 2004年; 4巻: 27-43.
- 3) 大津廣子. 訪問介護・訪問入浴介護サービス事業所の介護サービスの質向上への実施状況-都道府県別比較一 2004年; 5巻: 11-18.
- 4) 滝内隆子. 近代における看護管理者の名称・職務の変遷について, 看護歴史研究 2004年; 2: 9-17.
- 5) 滝内隆子. 在宅における感染管理-在宅における感染管理に関する研究プロセス一, Quality Nursing 2004年; 10巻: 4-7.
- 6) 滝内隆子, 前田修子. 「在宅における感染管理に関するマニュアル」の概要とその特徴, Quality Nursing 2004年; 10巻: 26-31.
- 7) 杉本浩章, 近藤克則, 樋口京子他. 在宅死亡患者割合に関連する因子の研究-全国訪問看護ステーション調査一, 老年社会科学誌 2004年; 25巻: 37-47.

- 8) 島田千穂, 近藤克則, 樋口京子他. 在宅療養高齢者の看取りを終えた介護者の満足度の関連要因, 月刊厚生
生の指標 2004年; 51巻: 18-24
- 9) 大津廣子. 看護師の賃金と労働条件, オイコノミカ 2005; 42巻: 153-169
- 10) 井上智可, 滝内隆子, 小松妙子. 手浴による局所循環促進効果—温湯浴とマッサージ浴の比較から—, ク
リニカルスタディ 2005年; 26巻: 35-39.
- 11) 城戸口親史, 水島ゆかり, 前田修子, 中山栄純, 滝内隆子, 浅見美千江. 在宅における看護師の感染管理
を必要とするケアの実施状況と課題, 日本在宅ケア学会誌 2005年; 9巻: 76-82.
- 12) 前田修子, 滝内隆子, 水島ゆかり. 在宅ケアにおいて必要な医療・衛生材料とその供給に関する医師・看
護師の捉え方—口腔・鼻腔内吸引に焦点をあてて—, 日本在宅ケア学会誌 2005年; 9巻: 93-99.
- 13) 吉井清子, 近藤克則, 樋口京子他. 地域在住高齢者の社会的関係の特徴とその後2年間の要介護状態発生
との関連性, 日本公衆衛生学会誌 2005年; 52巻: 456-467.

原著 (欧文)

- 1) Setozaki Y. The Dark Side of A Tale of Two Cities. Journal of Humanities—Language & Culture &
Literature. 2005;XXVIII:1-22.

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者: 大日康史, 研究分担者: 大津廣子, 下野恵子, 川口大司; 科学研究費補助金基盤研究
(C)(2): 公的介護保険の制度設計に関する総合的研究; 平成 14-15 年度; 3,800 千円 (1,900 : 1,900
千円)
- 2) 研究代表者: 樋口京子, 研究分担者: 近藤克則, 久世淳子; 科学研究補助金基盤研究(C)(2): 要介護
高齢者の療養場所の移動に関するコホート研究; 平成 14-16 年度; 2,900 千円(700 : 1,600 : 600 千
円)
- 3) 研究代表者: 大津廣子, 研究分担者: 大日康史, 足立みゆき, 渡邊亜紀子; 科学研究費補助金基盤研
究(C)(2): 高齢者の医療機関への受診行動と選好要因に関する研究—看護サービスの質向上の要素
—; 平成 16-17 年度 2,800 千円 (1,400 : 1,400 千円)
- 4) 研究代表者: 滝内隆子, 研究分担者: 前田修子; 科学研究費補助金基盤研究(C)(2): 在宅における感
染管理介入と教育プログラムの開発; 平成 16-17 年度; 1,400 千円(800 : 600 千円)
- 5) 研究代表者名: 佐々木真紀子, 研究分担者: 滝内隆子, 石井範子, 大島弓子, 村田勝敏, 長谷部真木
子, 工藤由紀子, 長岡真希子; 科学研究費補助金萌芽研究; 高齢者の便秘のリスク・アセスメント・
スケールの開発; 平成 16-17 年度; 1,000 千円(500 : 500 千円)
- 6) 研究代表者: 足立みゆき, 研究分担者: 大津廣子, 宮林郁子, 渡邊亜紀子; 科学研究費補助金基盤研
究(C)(2): 看護師の倫理的感受性の実態調査とその発達プロセスの構造化; 平成 16
-17 年度; 2,200 千円 (1,500 : 700 千円)
- 7) 研究代表者: 渡邊亜紀子; 科学研究費補助金若手研究 (B): 糖尿病患者の食事療法に対する葛藤の意
味を考慮した看護援助方法に関する研究; 平成 16-18 年度; 3,300 千円(900 : 1000 : 1400 千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

大津廣子:

- 1) 日本看護研究学会評議員(~平成 16 年 3 月)
- 2) 日本看護研究学会評議員(平成 16 年 4 月~現在)
- 3) 日本看護科学学会評議員(~現在)
- 4) 日本看護学教育学会評議員(~平成 15 年 8 月)
- 5) 日本看護医療学会評議員(平成 17 年 4 月~現在)

- 6) 日本看護医療学会評議員(～平成 17 年 3 月)
- 7) 日本看護技術学会評議員(平成 17 年 1 月～現在)

2) 学会開催

大津廣子：

- 1) 第 8 回日本看護研究学会東海地方会(平成 16 年 1 月，岐阜)

3) 学術雑誌

村中陽子：

- 1) 日本看護学教育学会誌；編集委員(平成 15 年 11 月～現在)

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

大津廣子：

- 1) 名古屋市立大学大学院経済学研究科・附属経済研究所第 8 回公開シンポジウム(平成 15 年 11 月，名古屋，招待講演『介護サービスの質向上への提言』演者)
- 2) 第 8 回日本看護研究学会東海地方会(平成 16 年 1 月，岐阜，特別講演「看護サービスの質向上へのアプローチー看護にいかす代替療法」座長)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

樋口京子：

- 1) 岐阜県看護協会教育委員(平成 16～17 年度)

10. 報告書

- 1) 大津廣子：公的介護保険における介護供給の研究：平成 14 年度科学研究費補助金 分担研究実績報告書：1-22(2003 年 3 月)
- 2) 大津廣子：公的介護保険の制度設計に関する総合的研究：平成 15 年度科学研究費補助金 分担研究報告書：1-10(2004 年 3 月)
- 3) 樋口京子，近藤克則，久世淳子：要介護高齢者の療養場所の移動に関するコホート研究：平成 14-16 年度文部科学省科学研究補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書：1-17，63-75，76-86(2005 年 3 月)

11. 報道

- 1) 大津廣子：「研究室から 大学はいま」質のよい看護技術の提供を目指す：岐阜新聞(2003 年 4 月 8 日)

12. 自己評価

評価

- 1) 基礎看護学分野として，看護技術習得状況に関する共同研究を行い，その結果を今後の指導に活用できるように，学内実習指導のみならず，臨地実習で学生に関わる臨地実習指導者に還元できている。
- 2) 異動と大学院修士課程（看護学専攻）開設に伴い，職場環境や教育活動に慣れることに精一杯で，研究活動に時間を費やすことが困難であった。また，研究活動も前の勤務地からの継続研究が中心になり，本講座の構成員との共同研究を積極的に推進することが出来なかった。
- 3) 高齢者のケアを，「満足度」をアウトカム評価の指標の一つとして用いた研究で，ケアの質を構成する要素や関連する要因を明らかにした。また，高齢者の居所の移動や虐待についての研究結果から，政策提言をする機会を得た。高齢者ケアの質に関する研究は，一定の成果は得ることができたと考える。
- 4) 研究テーマに関する研究を進め始めた段階のため，成果発表が十分にできていない。

現状の問題点及びその対応策

- 1) 構成員各自が研究テーマをもって研究活動を実施しているが，それだけでなく，学士課程の卒業生に求められる看護実践能力を育成するための教育方法や教材開発に関する研究を共同で行う必要がある。

- 2) 看護学生の現状把握はできているが、その結果から導きだされた教育方法を実施・評価する段階に至っていない。今後、各構成員で意見交換を行い、効果的な教育方法を実施・評価していきたいと考える。
- 3) 「看護研究のための英文抄読」の受講生が少ない。原因として、英語に関心をあまり持っていないことと選択科目が多くあることが挙げられよう。

今後の展望

- 1) 看護基礎教育の重要性が謳われている今日、看護学を学ぶ土台となる基礎看護学の担う役割は大きいと考えられる。学生個々のもつ能力を生かしつつ、看護実践能力を育成するための教育方法や教材開発および教育評価に関する研究を推進する。
- 2) 高齢者の終末期ケアの質の評価の指標作成を試み、その妥当性や信頼性の検証に取り組むことが課題である。

(2) 健康援助学分野

1. 研究の概要

本分野では、電子顕微鏡や蛍光顕微鏡に加え、生物物理学、分子生物学の技術を用いて、組織形態から分子のレベルにまで至る研究を行っている。形態レベルの研究では、各種哺乳動物の舌乳頭及び上皮剥離後の結合組織の表面構造を走査型電子顕微鏡により観察し、主に比較解剖学的側面から食物及び咀嚼方法との関係について研究している。一方、分子レベルの研究としては、GFP 融合タンパク質の遺伝子発現により、細胞内における各種タンパク質の挙動を生きた細胞を用いて解析している。そして、細胞内でのタンパク質間相互作用（結合－解離）について明らかにするために、GFP 変異体を用いた蛍光共鳴エネルギー移動法（FRET）による測定も行っている。本法は多様なタンパク質間相互作用に適用可能であるため、3 次元 FRET の開発や免疫染色への蛍光共鳴エネルギー移動法の応用についても研究している。また、中心小体構成タンパク質の遺伝子を同定し、そのタンパク質の局在や機能解析を行うことにより、中心小体が正確に複製するメカニズムや細胞分裂の制御機構との関連等を研究している。この他に、従来からリン脂質人工平面膜法を用いた膜電流測定に関する研究も継続しており、膜作用物質の機能解析を行うことが可能である。

2. 名簿

教授： 江村正一 Shoichi Emura
教授： 武藤吉徳 Yoshinori Muto

3. 研究成果の発表

著書（和文）
なし

著書（欧文）

- 1) Muto Y, Kawai K. Ion permeability induced in planar lipid bilayer membranes by quinone pigments derived from eukaryotic microorganisms. In: Tien HT, Ottova-Leitmannova A, eds. *Advances in Planar Lipid Bilayers and Liposomes*, pt 1. Amsterdam: Elsevier B.V.; 2005:121-157.
- 2) Muto Y, Okano Y. Immuno-FRET microscopy of the actin-binding protein NP25 *in situ*. In: Mendez-Vilas A, Labajos-Broncano L, eds. *Current Issues on Multidisciplinary Microscopy Research and Education*. Badajoz: Formatex Research Centre ; 2005:39-44.

総説（和文）
なし

総説（欧文）
なし

原著（和文）

- 1) 江村正一, 早川大輔, 陳華岳, 正村静子. ライオン *Panthera leo* 舌乳頭の観察, 哺乳類科学, 2003年; 43巻: 45-50.
- 2) 加藤信子, 武藤吉徳, 田中香お里, 渡辺邦友, 上野一恵. 腸内細菌 *Bacteroides fragilis* 由来スフィンゴリン脂質の哺乳類細胞への影響, 2003年; 29巻: 55-61.
- 3) 武藤吉徳, 田辺裕美子, 河合清, 飯尾英夫. クリマコストールのミトコンドリア呼吸鎖阻害作用, 原生動物学雑誌, 2003年; 36巻: 25-26.
- 4) 江村正一, 早川大輔, 陳華岳, 正村静子. アカカンガルー *Macropus rufus* 舌乳頭の観察, 岐阜大医紀, 2004年; 52巻: 30-35.

原著（欧文）

- 1) Emura S, Hayakawa D, Chen H, Shoumura S. Morphology of the lingual papillae in the tiger. *Okajimas Folia Anat. Jpn.* 2004;81:39-44.
- 2) Chen H, Shoumura S, Emura S. Ultrastructural changes in bones of the senescence-accelerated mouse (SAMP6): a murine model for senile osteoporosis. *Histol Histopathol.* 2004;19:677-685. IF 1.931
- 3) Chen H, Emura S, Yao X.F, Shoumura S. Morphological study of the parathyroid gland and thyroid C cell in senescence-accelerated mouse (SAMP6), a murine model for senile osteoporosis. *Tissue Cell* 2004;36:409-415. IF 0.937
- 4) Mori K, Yoshioka T, Kokuzawa J, Yoshimura S, Iwama T, Muto Y, Okano Y, Sakai N. Neuronal protein NP25 increases during neural differentiation. *Acta Sch Med Univ Gifu.* 2004;52:14-19.
- 5) Mori K, Muto Y, Kokuzawa J, Yoshioka T, Yoshimura S, Iwama T, Okano Y, Sakai N. Neuronal protein

- NP25 interacts with F-actin. Neurosci Res. 2004;48:439-446. IF 2.155
- 6) Takano Y, Adachi S, Okuno M, Muto Y, Yoshioka T, Matsushima-Nishiwaki R, Tsurumi H, Ito K, Friedman SL, Moriwaki H, Kojima S, Okano Y. The RING finger protein, RNF8, interacts with retinoid X receptor alpha and enhances its transcription-stimulating activity. J Biol Chem. 2004;279:18926-18934. IF 6.355
- 7) Chen H, Emura S, Isono H, Shoumura S. Effects of traditional Chinese medicine on bone loss in SAMP6:A murine model for senile osteoporosis. Biol Pharm Bull. 2005;28:865-869. IF 1.392

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：武藤吉徳，研究分担者：岡野幸雄，木村正志；科学研究費補助金萌芽研究：3次元蛍光共鳴エネルギー移動法による細胞内タンパク質間相互作用の解析；平成14-15年度；1,800千円（1,100：700千円）
- 2) 研究代表者：武藤吉徳；岐阜大学活性化経費(研究)：3次元蛍光共鳴エネルギー移動法の開発とタンパク質間相互作用のイメージング；平成16年度；1,200千円

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

江村正一：

- 1) 日本解剖学会評議員(～現在)
- 2) 日本臨床分子形態学会評議員(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

武藤吉徳：

Advances in Planar Lipid Bilayers and Liposomes: Member of Editorial Board (2004.05 ～現在)

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

なし

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

研究内容は、組織形態から生体分子のレベルまで広範囲に亘るが、分野内での教員間での共同研究は為されていない。また研究成果は、著書、原著とも少数ながら国際的にみても独自の成果が公表されているが、少人数の分野であることから出版数は比較的少ない。

現状の問題点及びその対応策

形態領域（電子顕微鏡）における研究の進行速度は、研究材料としての動物の器官及び組織の確保次第であり、今後これまで以上に全国の動物園及び各自治体の協力を得たいと考えている。一方、タンパク質の細胞内での動的な挙動に関する研究では、蛍光消光回復法（FRAP）の利用が必須である。今後、レーザー光源の導入などによって本法による測定を可能にしたい。

今後の展望

電子顕微鏡により野生哺乳動物の舌形態をさらに多く観察し、舌の構造と食性との関係を明らかにしたい。他方、生きた細胞内での各種タンパク質の相互作用や拡散等の分子動態を、細胞内三次元空間に亘って測定、解析する技術を確立したい。また、遺伝子レベルの研究についても学内の他の研究室との積極的な共同研究を行い、研究成果の奥行きを深める方途を見いだしたい。

〔母性看護学講座〕

(1) 母性看護学分野

1. 研究の概要

母性看護・助産学分野においては、ライフサイクルを通じた女性の健康支援に関する研究、周産期のケアに関する研究および母性看護・助産学教育に関する研究などを行っている。主な研究テーマは以下の通りである；女子学生のヘルスリスク行動とリプロダクティブヘルス教育、月経と心理社会的要因に関する研究、周産期のメンタルヘルス、幼児の生と性に関する教育、母性看護領域におけるスピリチュアルケア、女性の健康観と保健行動に関する研究、助産（母性看護）技術の効果的な教育方法の検討、母乳哺育をする女性のケアに関する研究や、看護場面における看護者の共感的応答に関する質的研究、家族参加型出産に関する研究など。女性の健康問題に関する教員個々の関心領域は多岐に渡っているが、いずれも実践に即したケアの質の向上、教育の質の保証を図る研究に努力している。

2. 名簿

教授：	野田洋子	Yoko Noda
教授：	松宮良子	Yoshiko Matsumiya
助手：	板谷裕美	Yumi Itaya
助手：	野畑直子	Naoko Nohata
助手：	大久保友香子	Yukako Okubo

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 野田洋子. 女性と月経：吉沢豊予子編. 女性生涯看護学ーリプロダクティブヘルスとジェンダーの視点からー, 東京：真興交易；2004年：204-218.
- 2) 野田洋子. ステップ2 自分にあったセルフケアを見つける：松本清一監修. 月経らくらく講座, 東京：文光堂；2004年：190-199.
- 3) 松宮良子. メヂカルフレンド社編集部編. クリニカルスタディブック 2ー実習に役立つ病態マップ 第2版, 東京：メヂカルフレンド社；2005年：164-167

著書（欧文）

なし

総説（和文）

- 1) 野田洋子. 実践！セルフケアで月経痛をコントロールしよう, 季刊セクシュアリティ 2005年：23巻：16-25.

総説（欧文）

なし

原著（和文）

- 1) 小野廣紀, 栢下淳, 青山武史, 青木良光, 松宮良子, 武藤吉徳, 杉浦浩子, 石原多佳子, 牧野茂徳, 山田光子, 後閑容子, 伊藤孝治, 若林和夫, 轟伊佐雄. 岐阜大学学生の食生活調査（食品群の摂取状況）ー自宅外通学学生および男子学生の食事は悪いか？ー, 岐阜市立女子短期大学研究紀要 2003年；52号：127-133.
- 2) 久世真規子, 島内慶子, 恩田麻由, 亀山笑子, 松宮良子. 朝食摂取の有無による作業率の変化, 岐阜県母性衛生学会誌 2004年；31・32号合併号：21-25.
- 3) 青山武史, 青木良光, 松宮良子, 若林和夫. 中規模総合大学学生の食生活調査と学内食堂における食生活改善の試みー食生活へのサポートの必要性ー, 岐阜県母性衛生学会誌 2004年；31・32号合併号：27-36.

原著（欧文）

なし

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：片平敬子（聖徳大学短期大学部），研究分担者：野田洋子；科学研究費補助金基盤研究(C)(1)：女子学生のヘルスリスク行動とリプロダクティブヘルス；平成 16-17 年度；2,000 千円（1,600：400 千円）

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

野田洋子：

- 1) 日本母性衛生学会評議員(平成 16 年 4 月～現在)
- 2) 岐阜県母性衛生学会幹事(平成 16 年 4 月～現在)
- 3) 周産期メンタルヘルス研究会 (ISP-Japan) 監事(平成 16 年 10 月～現在)

松宮良子：

- 1) 岐阜県母性衛生学会幹事(~現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

なし

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

野田洋子：

- 1) 日本助産師会岐阜県支部プロジェクト委員(平成 16 年度)
- 2) 性の健康医学財団評議員(平成 16～17 年度)
- 3) 全国助産師教育協議会理事(平成 17 年度)
- 4) 岐阜県岐阜市地域保健所ピアカウンセリングプロジェクト委員(平成 16～17 年度)

10. 報告書

なし

11. 報道

- 1) 野田洋子：研究室から大学は今「学生中心にピアカウンセリング」：岐阜新聞(2005 年 8 月 9 日)

12. 自己評価

評価

個人的にそれぞれの研究テーマを持って研究を実践しているが、研究成果としては学会への口頭発表の段階であり、学術論文としての成果発表には至っていない。また分野の構成教員は平成 16 年度より現職に従事したことから、現職を表記した成果が少ない結果ともなった。

現状の問題点及びその対応策

現在、母性看護・助産学分野は 5 人の教員(教授 2, 助手 3)で構成されているが、関心領域が多岐に渡っていること、また母性看護・助産・大学院教育と過密なスケジュールから時間的余裕がないことなど

から、分野としての共同研究にまで至っていないのが現状である。また、現在学部において助産師教育を行っているが専攻科、もしくは大学院教育への転換の必要性が急務であること、臨地実習施設の確保が困難であることなど、教育上の問題も山積している。こうした教育上の問題を解決することが先決ではあるが、実践現場との連携の強化、共同研究の推進によりケアの質の改善を図ることにより、実践の場である臨地実習施設の確保へとつなげることも可能となる。また少ない教員で効率的に質の高い教育を提供するための教育方法、CAI教材の開発も重要な課題である。

今後の展望

総合大学、医学部に併設された看護学科であることのメリットを生かした他学部との共同研究の可能性を模索していきたい。また学外の研究費の獲得、実践現場との共同研究、国内外の大学との学術交流を進めていきたい。

(2) 小児看護学分野

1. 研究の概要

小児看護学分野では、気管支喘息やてんかんなどの慢性疾患や身体的な障害をもつ子どもと家族の QOL に着目し、特に在宅療養場面における子どもと家族の QOL を高められるような看護職の援助方法に関する研究を行ってきた。研究は、岐阜大学内の学部間の連携にとどまらず、名古屋大学、愛知学泉大学、中部大学との共同研究も行ってきた。具体的には、重度障害や難病をもつ子どもを家庭でケアする家族から、至った経緯や受け入れ状況を含む在宅ケアの現状、親へのサポートの問題点を明らかにし、別の研究では、全国調査から気管支喘息をもつ学童自身が感じる自記式の QOL 調査票を開発した。また、岐阜県や愛知県の患児の家族会との接点を持ち、集会でのアドバイザーとしての役割を果たす実践的な関わりを行う中で、子どもと家族の考え方や行動の変容を捉えてきた。

研究テーマ：

- ・アレルギーを持つ子どもの QOL 向上に関する看護師の役割
- ・食物アレルギーをもつ乳幼児の家族への支援
- ・在宅療養をする小児の地域支援
- ・行為障害を有するてんかん患児の学校生活指導
- ・障害児の在宅ケアにおける家族への支援体制強化
- ・障害をもつ双子の育児・介護をする家族への支援
- ・単一カルボニンホモロジードメインタンパク質 NP25 の構造機能解析

2. 名簿

助教授：	杉浦太一	Taichi Sugiura
講師：	桑田弘美	Hiromi Kuwata
助手：	佐合真紀	Maki Sago

3. 研究成果の発表

著書（和文）
なし

著書（欧文）
なし

総説（和文）

- 1) 杉浦太一. 男性看護師の役割—小児看護領域と教員の立場から—, 日本クリティカルシンキング研究会誌 2004年; 4巻: 16-20.
- 2) 杉浦太一. いま, 男性看護師を考える—男子看護学生との関わりから, 男性看護師が教員でいることの意味を探る, 看護教育増刊号 2004年; 45巻: 1043-1047.

総説（欧文）
なし

原著（和文）

- 1) 桑田弘美, 村井静子, 三牧孝至. 小児の在宅ケアにおける看護師の役割—母親へのインタビュー結果からの考察—, 岐阜大学教育学部治療教育研究紀要 2003年; 25号: 39-46.
- 2) 桑田弘美, 村井静子, 三牧孝至. てんかん患児の学校生活—退院後の学校適応に向けた援助—, 岐阜大学教育学部治療教育研究紀要 2003年; 25号: 47-52.
- 3) 桑田弘美, 村井静子, 三牧孝至. 在宅障害児の母親の障害受容の実際, 岐阜大学教育学部治療教育研究紀要 2004年; 26号: 1-7.
- 4) 桑田弘美, 村井静子, 三牧孝至. 難病を持つ親の在宅療養への思い, 岐阜大学教育学部治療教育研究紀要 2004年; 26号: 9-15.
- 5) 桑田弘美, 桂トシエ, 村井静子. 障害児の在宅ケアにおける家族への支援体制強化に関する調査研究Ⅱ—難病を持つ子の母親の在宅ケアの実際—, 第35回日本看護学会論文集—地域看護— 2004年; 33-35.
- 6) 山田知子, 石黒彩子, 三浦清世美, 浅野みどり, 杉浦太一. 気管支喘息をもつ思春期学童のコンプライアンスアンケート調査によるコンプライアンス低得点群の特徴—, 日本看護医療学会雑誌 2005年; 7巻: 26-33.
- 7) 三浦清世美, 浅野みどり, 杉浦太一, 山田知子, 石黒彩子. 改良版 JSCA-QOL Ver.2 を用いた喘息をもつ子どもの QOL 調査—小学生と中学・高校生との比較—, 金城学院大学大学院人間生活学研究科論集 2005年; 5号: 27-36.

原著 (欧文)

- 1) Sugiura T, Asano M, Miura K, Ishiguro A, Torii S. Development of the Revised Final Version of the Quality of Life of Japanese School Aged Children with Asthma Questionnaire—The Characteristics of the Low QOL Scoring Group and Development of an Evaluation Form—. Allergol Int. 2005;54:589-599.
- 2) Kuwata H, Yoshioka T, Muto Y, Kuwata K, Okano Y. Structural and Functional Characterization of NP25, a Single CH Domain Protein. Acta Sch Med Univ Gifu. in press.

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：桑田弘美，研究分担者：村井静子；科学研究費補助金基盤研究(C)(2)：障害児の在宅ケアにおける家族への支援体制強化に関する調査研究；平成 14－16 年度；3,500 千円(1,700：900：900 千円)
- 2) 研究代表者：石黒彩子（名古屋大学），研究分担者：森田せつ子，浅野みどり，三浦清世美，鳥居新平，杉浦太一；科学研究費補助金基盤研究(A)(2)：喘息学童の QOL 評価と QOL 低下要因の検討(QOL 調査票を用いた全国調査)；平成 14－16 年度；17,300 千円(9,000：5,100：3,200 千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

なし

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

なし

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

- 1) 桑田弘美：障害児の在宅ケアにおける家族への支援体制強化に関する調査研究；平成 14－16 年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2) 研究成果報告書：1－86(2005 年 3 月)

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

平成 15 年（2003 年）までは教員が 2 名の分野であり，平成 16 年（2004 年）から 3 名の教員の分野になった。しかし，平成 17 年（2005 年）に教員の移動があり，現在は，助教授，講師，助手がそれぞれ 1 名の教授不在の分野である。そのため，各教員が岐阜大学の所属となる研究成果は少ないが，総説（和文）2 編，原著（和文）5 編，原著（欧文）3 編の発表があることと，競争的外部資金の獲得状況をみても，分野の規模に比較してかなり満足できる状況となった。その理由として，教員の研究テーマが看護や介護をめぐる時代のニーズに即した物であったことが考えられる。また，学外との共同研究が行えていることも良好な成果としてとらえることができる。

研究成果の中に，小児看護学の教育内容や効果に関するものがなかったことは，教員の異動によって教育内容に一部変更があり，効果の評価にまで至らなかったという理由が考えられる。

現状の問題点及びその対応策

この 3 年間の研究成果上の問題点は，著書が無かったことである。また，平成 17 年（2005 年）は競争的外部資金の獲得ができていない状況も問題である。学外との共同研究においても，当分野が主導する形で行っていくことが課題である。今回の研究成果には含まれていないが，学術集会における研究成果の発表が原著論文などの形で正式な成果発表に結びつける頻度を多くする必要がある。

小児看護学教育の効果の評価は，さまざまな角度から分析し，学会発表だけでなく教科書や教材という形で成果を発表していく必要がある。

今後の展望

今後は，平成 17 年から着任した助手 1 名を含む 3 名の教員が研究を行っていくため，研究成果の数は増えていくことが予測される。著書の数を増やすことも課題である。研究は，障害児の家族に対する在宅支援体制を整えるための研究と，食物アレルギーをもつ子どもと家族に対する援助に関する研究を進めていくことを考えている。そのためには，学内でも小児看護学の分野を越えたさまざまな分野との連携を進める必要性を感じている。

〔成人・老年看護学講座〕

(1) 成人看護学分野（慢性期）

1. 研究の概要

本分野における看護の対象は、病気とその治療、障害などによる身体的、社会的・心理的制約を受けながら生きる人々である。次に教育の対象は、専門的な問題解決能力に優れ、創造的な実践力をもつ看護学生を育成することであり、さらには専門分野でリーダーシップ発揮できる修士の学生に関わる。それゆえに慢性期看護の理論的な基盤が不可欠である。臨床では理論と実践を体系的に繋げてゆく必要がある。従って第一にはこのような状態の対象に、どのような看護が求められているのか、医療・福祉・生涯教育と視野を広げて研究の課題としている。具体的には、治療やリハビリテーションと Will-Being の関係、セルフケアを生涯必要とされる生活習慣病に関連する看護研究、脳・神経疾患の後遺症である高次脳機能障害、がんの後遺症であるリンパ浮腫をもった人々とその家族患者会への支援、さらには「End of Life」に関する看護研究の対象としている。研究・調査などで得られた結果は、臨床に限らず、学生、臨床看護師へ還元するとともに予防・症状の進行を防御するような活動を行っている。

<主な研究テーマ>

1) 慢性疾患患者の HRQOL (Health Related-QOL) に関する研究

2) 高次脳機能障害者の医療・福祉・教育に関する研究

「脳外傷、脳梗塞等の治療・リハビリテーションと患者教育の関係および患者とその家族の QOL」「看護の継続システムとセルフケア」

3) 「END of Life」と看護・看護教育に関する研究

「ターミナルケア・ホスピスケア・緩和ケアなど医療者側からの提案に留まらず人生の終末について看護学的生軸育課題の明確化とシステム」

4) 看護学生の実践能力向上に関わる研究

2. 名簿

教授：	細野容子	Yoko Hosono
助教授：	足立久子	Hisako Adachi
助手：	恒川育代	Ikuyo Tsunekawa
助手：	西尾育子	Ikuko Nishio

3. 研究成果の発表

著書（和文）
なし

著書（欧文）
なし

総説（和文）

- 1) 足立久子. I型糖尿病患者の現在の健康状態の評価に与える糖尿病スキーマの影響, ヒューマン・ケア研究 2004年; 5巻: 5-58.
- 2) 細野容子. 「病」と看護職—成人期における看護職, 金芳堂 2005年; 69-90
- 3) 細野容子. 「病」と看護職—病人と患者 慢性期の「病」「病人」と看護, 金芳堂 2005年; 112-119

総説（欧文）
なし

原著（和文）

- 1) 足立久子. 糖尿病患者シナリオを用いた治療法の選択に関する研究—看護師を対象として—, ヒューマン・ケア研究 2003年; 3・4巻: 48-53.
- 2) 西尾育子. 瘻孔の自己管理により社会復帰を可能にした一事例, 東海ストーマリハビリテーション研究会誌 2003年; 23巻: 32-35
- 3) 足立久子. Time Trade-Off法を用いた外来通院中の糖尿病患者のHRQOL(Health-Related QOL)の評価, 日本看護科学会誌 2004年; 24巻: 3-11.

原著（欧文）
なし

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

1) 研究代表者：足立久子；科学研究費補助金基盤研究(C)(2)：Time Trade-Off 法による糖尿病患者の健康状態の評価に関する臨床的研究；平成 15-17 年度；1,600 千円(500：400：700 千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

なし

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

なし

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

1) 足立久子：慢性疾患患者の QOL に関する臨床的研究—Time Trade-Off 法による検討—：平成 15 年度文部科学省科学研究補助金 総括・代表報告書：1-51(2003 年 3 月)

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

研究途上にあり，発表にはいたっていない。

現状の問題点及びその対応策

1) 慢性看護学は守備範囲が広く，漸く援助・患者教育の理論的な基盤が整えられてきた状況にあるが，入院期間の短縮等によって対象を特定する調査研究が難しくなっている。

その対応策としては，研究のフィールドの拡大を行いたいと考えている。

2) 慢性看護学に携わる教員は各自研究テーマを持って活動していることから共同研究困難であるが，年毎に共通するテーマに沿って研究を続けたい。

今後の展望

文化間の比較などの検討を重ねるとともに，国内・外の施設との共同研究や研究会の開催などにより実用性の高い研究を目指したい。

(2) 成人看護学分野（急性期）

1. 研究の概要

成人看護学急性期分野では、看護学教育・看護実践に活かすことを目的とした研究課題を設定し、教材開発や実態調査、実験/準実験等を行っている。

看護学教育に関する研究では、手術を受ける患者の看護について、学習方略の一つとしてのコンピュータ活用に着目し、バーチャルリアリティ/マルチメディア CAI(Computer Assisted Instruction)教材を開発している。開発したコンピュータ教材は、CD や学内 LAN(Local Area Network)によって自己学習できるよう学習環境を整えて、学生個々の自主的・主体的学習に資するとともに、その学習効果の検証を重ねている。これまでに「術後 24 時間の看護」、「手術室入室オリエンテーション」、「術後室の準備」、「麻酔導入までの看護」をテーマとした教材を開発してきた。現在は、さらにコンテンツの開発・改良をすすめ、「術前練習」「救命救急」に関する教材開発や、既存の Web 教材を活用した e-learning による学習効果の検証（客観的データに基づく評価研究）等を行っている。

看護実践に関する研究では、術後患者の急性混乱・錯乱予防と早期発見のための看護を明らかにするための基礎研究を行っている。現在は、術後せん妄に関する日本語版スケール（NEECHAM Confusion Scale）の信頼性と妥当性の検討、および術後せん妄の発症過程と発症因子の分析に関するアルゴリズムの開発に取り組んでいる。

2. 名簿

教授：	竹内登美子	Tomiko Takeuchi
教授：	西本 裕	Yutaka Nishimoto
助教授：	松田好美	Yoshimi Matsuda
助手：	高橋由起子	Yukiko Takahashi
助手：	寺内英真	Hidemasa Terauchi

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 高橋由起子, 竹内登美子. 頭蓋内圧亢進と看護：竹内登美子編. 周手術期看護 4—脳神経外科で手術を受ける患者の看護—, 東京：医歯薬出版株式会社；2003 年：51—58.
- 2) 松田好美, 脳腫瘍患者の周手術期看護：竹内登美子編. 周手術期看護 4—脳神経外科で手術を受ける患者の看護—, 東京：医歯薬出版株式会社；2003 年：124—146.
- 3) 西本 裕. 骨移植と骨銀行：二ノ宮節夫, 越智隆弘, 岩谷力, 富士恭輔, 国分正一編. 今日の整形外科治療指針 第 5 版, 東京：医学書院；2004 年：42—43.
- 4) 西本 裕著. 運動器疾患で手術をうける患者の看護に必要な知識—骨, 関節と筋, 神経の基礎科学—：竹内登美子編. 周手術期看護 5—運動器疾患で手術を受ける患者の看護—, 東京：医歯薬出版株式会社；2005 年：1—50, 51—64, 89—97, 127—134.
- 5) 高橋由起子, 竹内登美子. 人工股関節置換術を受ける患者の看護：竹内登美子編. 周手術期看護 5—運動器疾患で手術を受ける患者の看護—, 東京：医歯薬出版株式会社；2005 年：65—88.
- 6) 松田好美. 喉頭癌 laryngeal cancer：メヂカルフレンド社編集部編. 実習に役立つ病態マップ—形態機能マップ付き—改訂 2 版, 東京：メヂカルフレンド社；2005 年：218—221.
- 7) 寺内英真. 初期対応時のフィジカルアセスメント—腰背部痛を訴える患者の観察—：山内豊明編. フィジカルアセスメントのコツと落とし Part 1, 東京：中山書店；2005 年：46—47.
- 8) 寺内英真. 初期対応時のフィジカルアセスメント—救急外来初療時における蕁麻疹患者の問診と観察のポイント—：山内豊明編. フィジカルアセスメントのコツと落とし Part 1, 東京：中山書店；2005 年：52—53.
- 9) 西本 裕. 骨腫瘍切除後の塊状同種骨移植による再建の長期成績：岩本幸英編. 別冊整形外科—骨・軟骨移植—最近の知見, 東京：南江堂；2005 年：88—93.
- 10) 西本 裕. 同種骨移植による再建のコツ：岩本幸英編. 骨・軟部腫瘍外科の要点と盲点, 東京：文光堂；2005 年：222—226.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

- 1) 孫継紅, 竹内登美子. 日本の認定看護師と専門看護師に関する文献研究, 臨床看護 2003 年；29 巻：1721—1730.
- 2) 竹内登美子. コンピュータ活用による看護教育—キャンパスの情報化と病院の電子カルテに対応した看護教育, 看護展望 2003 年；28 巻：1476—1481.

- 3) 西本 裕, 細江英夫, 大野貴敏, 入江善二, 清水克時. 仙骨脊索腫の診断と治療, 脊椎脊髄ジャーナル 2003年; 16巻: 1199-1204.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 結城藍, 竹内登美子, 比嘉肖江. 開腹術を受ける患者に対する全身麻酔導入までのタッチの効果, 臨床看護 2003年; 29巻: 565-582.
- 2) 高橋由起子, 竹内登美子, 松田好美. 手術室入室オリエンテーション用 CAI 教材の開発とその学習効果—成人看護学実習生を対象として—, 臨床看護 2003年; 29巻: 1670-1676.
- 3) 梅村俊彰, 竹内登美子. 電子カルテ対応を目指した NANDA-NOC-NIC の連携と看護実践への活用に関する検討, 臨床看護 2003年; 29巻: 1604-1612.
- 4) 松田好美, 竹内登美子, 小澤和弘, 高橋由起子, 西本裕. 外科看護学実習のための多視点動画像を利用した教材の開発と評価, 看護展望 2003年; 28巻: 70-76.
- 5) 細江英夫, 若原和彦, 赤池敦, 坂口康道, 宮本敬, 野澤聡, 小原明, 西本裕, 清水克時. 特発性脊髄ヘルニアの1例, 臨床整形外科 2003年; 38巻: 1339-1343.
- 6) 橋本孝治, 宮本敬, 児玉博隆, 西本 裕, 細江英夫, 清水克時, 高津敏郎, 下川邦泰. 頸椎に発生した solitary fibrous tumor の1例, 東海脊椎外科 2003年; 17巻: 124-125.
- 7) 孫継紅, 竹内登美子, 石井秀宗: 重症集中ケア認定看護師の役割と看護実践での成果に関する実態調査研究, 臨床看護 2004年; 30巻: 587-592.
- 8) 竹内登美子, 石井秀宗, 比嘉肖江: 術後看護用 CAI の学習履歴分析によるコースウェアの評価, 日本看護研究学会誌 2004. 27巻: 15-24.
- 9) 世沢薫, 久島泰仁, 大野貴敏, 清水克時, 西本裕, 下川邦泰. 右上腕骨骨腫瘍の1例, 東海骨軟部腫瘍 2004年; 16巻: 7-8.
- 10) 角田恒, 大野貴敏, 大野義幸, 清水克時, 西本裕, 下川邦泰. 左大腿骨骨腫瘍の1例, 東海骨軟部腫瘍 2004年; 16巻: 21-22.
- 11) 三宅智, 大野貴敏, 下川邦泰, 清水克時, 西本裕, 廣瀬善信, 坂田佳子. 肩軟部腫瘍の1例, 東海骨軟部腫瘍 2005年; 17巻: 17-18.

原著 (欧文)

- 1) Hirakawa A, Miyamoto K, Hosoe H, Nishimoto Y, Shimokawa K, Shimizu K. Solitary Fibrous Tumor in the Occipitocervical Region: A Case Report. Spine. 2004;29:E547-E550. IF 2.299

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者: 松田好美, 研究分担者: 竹内登美子, 高橋由起子; 科学研究費補助金基盤研究(C)(2): 術後せん妄の予防及び早期発見を目的とした日本語版 NEECHAM スケールの信頼性・妥当性の検証; 平成 14-16 年度; 2,800 千円(1,900 : 400 : 500 千円)
- 2) 研究代表者: 竹内登美子, 研究分担者: 松田好美, 高橋由起子, 村瀬康一郎, 小澤和弘; 科学研究費補助金基盤研究(C)(2): 臨床看護実践能力を高める Web 教材の開発と看護教育支援システムの構築に関する研究; 平成 15-17 年度; 2,300 千円(1,300 : 500 : 500 千円)
- 3) 研究代表者: 岡本恵里, 研究分担者: 竹内登美子, 足立みゆき; 科学研究費補助金基盤研究(C)(2): がん看護に関わる看護者のアドボカシーの実態調査とカウンセリングシステムの確立; 平成 15-16 年度; 1,800 千円(1,100 : 700 千円)
- 4) 研究代表者: 寺内英真; 平成 16 年度 日本看護協会出版会研究助成金: 心臓血管外科領域における術後せん妄の発症要因と徴候との関係探索研究; 平成 16 年度; 200 千円
- 5) 研究代表者: 松田好美, 研究分担者: 小倉真治, 寺内英真, 竹内登美子, 高橋由起子; 科学研究費補助金基盤研究(C): 救急看護における看護実践能力の向上を目的としたコンテンツ及び教材開発に関する研究; 平成 17-18 年度; 3,400 千円(2,200 : 1,200 千円)
- 6) 研究代表者: 寺内英真; 科学研究費補助金若手研究(B): 心臓血管外科領域の手術患者における術後せん妄発症予測に関する基礎的研究; 平成 17-19 年度; 2,500 千円(900 : 900 : 700 千円)
- 7) 研究代表者: 高橋由起子, 研究分担者: 竹内登美子, 松田好美, 西本裕, 加藤直樹; 科学研究費補助金基盤研究(C): 臨床看護実践能力を高める術前指導用 Web 教材開発と E ラーニング活用による学習効果; 平成 17-19 年度; 2,200 千円(1,200 : 500 : 500 千円)
- 8) 研究代表者: 野田博, 研究分担者: 小鹿丈夫, 川崎晴久, 伊藤聡, 毛利哲也, 西本裕, 青木隆明, 栄枝裕文, 篠崎昌人, 岩村真事, 安倍基幸, 工藤咲子; 新エネルギー・産業技術総合開発機構委託・補助事業「リハビリ支援ロボット及び実用化技術の開発」: イメージトレーニング機能付き手指上肢リ

ハビリ支援システムの研究開発；平成 17-19 年度；4,759 千円(2,094：1,523：1,142 千円)(岐阜大学医学部分)

- 9) 研究代表者：紀ノ定保臣，研究分担者：梅本敬夫，白鳥義宗，竹内登美子；科学研究費補助金基盤研究(B)：次世代型電子カルテシステムによる診療工程・病院運営工程の統合分析環境の構築と解析；平成 17-18 年度；12,100 千円(7,400：4,700 千円)
- 10) 研究代表者：保住功，研究分担者：犬塚貴，田中優司，木村暁夫，高田知二，竹内登美子，岡本恵里；科学研究費補助金萌芽研究：難病患者のニーズに適合した IT 機器の活用と心のケアに関するネットワークの構築；平成 17-18 年度；2,400 千円(1,300：1,100 千円)

2) 受託研究

- 1) 竹内登美子，小澤和弘，坪井正人，猪嶋進，松田好美，西本裕，高橋由起子，曾賀野健一：医師・看護師共有の電子カルテの研究開発；平成 15 年度；2,000 千円：クレドメデカ(株)

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

- 1) 速水悟，川崎晴久，西本裕：リハビリテーション訓練技術教育装置；平成 15 年度

6. 学会活動

1) 学会役員

竹内登美子：

- 1) 日本看護科学学会評議員(～現在)
- 2) 日本看護研究学会評議員(～現在)

松田好美：

- 1) 日本看護学教育学会評議員(～現在)

西本 裕：

- 1) 日本整形外科学会代議員(平成 17 年 3 月～現在)
- 2) 中部日本整形外科災害外科学会評議員(～現在)

2) 開催学会

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

西本 裕：

- 1) 第 19 回岐阜県超音波研究会(平成 15 年 11 月，岐阜，特別講演「整形外科領域の超音波診断」演者)

竹内登美子：

- 1) 第 3 回中国気道管理看護学会(平成 16 年 8 月，北京，招聘講演「ICU で用いる呼吸理学療法と EBN」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

西本 裕：

- 1) 岐阜県社会保険診療報酬支払基金診療報酬請求審査委員会委員(平成 15-17 年度)

10. 報告書

- 1) 竹内登美子, 小澤和弘, 坪井正人, 猪嶋進, 松田好美, 西本裕, 高橋由起子, 曾賀野健一: 医師・看護師共有の電子カルテの研究開発: 平成 15 年度ソフトピアジャパン企画支援室共同研究報告書: 6-1-14(2003 年 4 月)
- 2) Naganuma K, Hayamizu S, Takahashi Y, Nishimoto Y, Matsuda Y, Takahashi Y. Utterance Analysis in Medical Cases for Spoken Dialog System. Proceedings of the Tenth International Conference on Virtual Systems and Multimedia 954-961(2004, 10)
- 3) 竹内登美子, 綿貫成明, 松田好美, 寺内英真, 高橋由起子, 五島光子, 西本裕: 術後せん妄のケアプログラム (周手術期看護<術後急性期看護>): 主任研究者 水流聡子: 保健・医療・福祉領域の電子カルテに必要な看護用語の標準化と事例整備に関する研究: 平成 15-16 年度厚生労働科学研究費補助金医療技術評価総合研究事業 総括研究報告書: 73-92(2005 年 3 月)
- 4) 岡本恵里, 竹内登美子, 足立みゆき: がん看護に関わる看護師のアドボカシーの実態調査とカウンセリングシステムの確立: 平成 15-16 年度科学研究費補助金 分担報告書: 1-50(2005 年 4 月)

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

これまでに作成したコンピュータ教材や患者参加型電子カルテシステムは, 学習/実践効果や最新の EBN にもとづいた内容に改良しながら, その研究成果を発表してきた。また, 開発したコンピュータ教材は CD や学内 LAN(Local Area Network)によって自己学習できるよう学習環境を整え, 教育的側面からの効果を高めてきた。

術後せん妄ケアのアルゴリズムに関する研究は, 学会シンポジウムや研修会で発表し, 多職種の専門家による意見交換を行ってきた。実用化までには更なる研究が必要であるが, 術後の看護ケアを担う看護師らの高い関心を集めている。なお, 術後せん妄に関する日本語版スケール (NEECHAM Confusion Scale) の信頼性と妥当性の検討に関する研究は, 現在続行中である。

現状の問題点及びその対応策

セミナー室へのコンピュータ設置等により, 学内における物理的環境は整いつつあるが, コンピュータに関連したセキュリティ対策を強化していく必要がある。イントラネットによる学内 LAN での限定使用や, パスワード入力による学習等を考慮しつつ, 学生にとっての最適な学習環境の提供が今後の課題である。その方法の一つとして, AIMS(Academic Instructional Media Service)の利用方法を検討している。

今後の展望

コンピュータ教材は看護基礎教育のみにとどまらず, 看護師の生涯教育にも応用できる。現場の看護師と協力しながら, 臨床場面での体験でないと修得が困難であるといわれている看護実践能力の育成に視点をのいた教材開発を考えている。

また, 術後せん妄ケアのアルゴリズムに関する研究は, 「高度専門看護実践のアルゴリズムの可視化」という全国的かつ体系的な研究として継続・発展させていく予定である。

(3) 老年看護学分野

1. 研究の概要

老年看護分野では、高齢社会から超高齢社会への途上にある現在、多様な生活背景や価値観をもつ高齢者の生活支援や健康維持に対し、予防的な視点を含みながらどのようにサポートしていくことができるのか、また、どのようなサポートが必要であるかなど、教育および看護実践を意図した研究テーマに取り組んでいる。

教育および看護実践に関しては、学生にとって年齢差の大きい高齢者を理解するのは容易なことではなく、時には生理機能の低下に焦点化し「何もできない人」、「衰えている人」などの認識を持ちやすい。しかし、人間は一生成長し続ける存在としてみることで、「持てる力」を見いだすことができる。この視点を育成することで高齢者の健康維持や生活のQOLに貢献できると考えており、看護実践としての有効性に関する研究を実施している。また、臨地実習においては、高齢者の「もてる力」を重視する方法を取り入れており、教育方法としての効果についても検証中である。

看護実践のアプローチの方法に関しては、老人ホームで実践されている高齢者にとってのQOLを意図した「アクティビティ」の効果について検討している。

また、老年看護は高齢者を対象にするだけでなく、高齢者を取り巻く周囲、つまり家族やコミュニティの存在も大きいことから、高齢者を理解するための方策として、地域の人々に「高齢者疑似体験」を実施している。これらの効果についても検証したいと考えている。

2. 名簿

教授：	箕浦とき子	Tokiko Minoura
助教授：	松波美紀	Miki Matsunami
助手：	服部真弓	Mayumi Hattori
助手：	温水理佳	Rika Nukumizu

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 箕浦とき子. 良眠を促す看護技術：奥野茂代，大西和子編. 老年看護技術，東京：ヌーヴェルヒロカワ；2003年：31-36.
- 2) 松波美紀. 在宅における事例－病院から介護老人保健施設そして家庭に帰る事例－：岩瀬緑，宮崎徳子，山田紀代美編. 事例を用いた高齢者の看護過程の展開－セルフケアモデルを使って－，東京：ヌーヴェルヒロカワ；2003年：172-191.
- 3) 箕浦とき子. 看護活動の構造：佐藤登美編. 新体系看護学 16 看護学概論，東京：メヂカルフレンド社；2004年：421-433.
- 4) 箕浦とき子. 危篤・終末時の看護：川村佐和子，志自岐康子，松尾ミヨ子編. ナーシング・グラフィカ 基礎看護学 基礎看護技術，東京：メディカ出版；2004年：421-433.
- 5) 箕浦とき子. 高齢者の理解：松村三千子編. 神戸常磐短期大学通信制課程 老年看護学概論，東京：紀伊國屋書店出版部；2005年：17-34.
- 6) 箕浦とき子. 患者の心理：佐藤登美編. 看護学入門 4 巻 一看護と倫理・患者の心理，東京：メヂカルフレンド社；2005年：83-203.
- 7) 松波美紀. 生活の視点からみた老年期の理解および QOL：松村三千子編. 神戸常磐短期大学通信制課程 老年看護学概論，東京：紀伊國屋書店出版部；2005年：97-112.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

なし

総説（欧文）

なし

原著（和文）

- 1) 松波美紀. 初期情報収集とその活用方法の検証，看護診断 2003年；8巻：42-503.
- 2) 箕浦とき子. 特別養護老人ホーム利用高齢者における誕生日の効果，高齢者のケアと行動科学 2005年；10巻：20-27.

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：松波美紀；科学研究費補助金萌芽研究：高齢者の“持てる力”を活用した生活援助技術の開発に関する研究；平成 16-17 年度；2,200 千円(1,500：700 千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

箕浦とき子：

- 1) 日本老年行動科学会常任理事(～現在)
- 2) 日本看護学教育学会評議員(平成 15 年 8 月～現在)

松波美紀：

- 1) 日本看護診断学会評議員(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

箕浦とき子：

- 1) 日本老年行動科学会誌；編集委員(平成 17 年 8 月～現在)

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

箕浦とき子：

- 1) 第 23 回関東甲信越地区看護研究学会（平成 15 年 11 月，横浜，パネルディスカッション「臨地実習を問う」座長）
- 2) 第 7 回日本老年行動科学会愛媛大会（平成 16 年 12 月，愛媛，特別講演「介護保険の現状と課題」座長）
- 3) 第 8 回日本老年行動科学会学術集会東京大会（平成 17 年 9 月，東京，ケースワーク「家族理解と情報収集・伝達のあり方」コメンテーター・スーパーバイザー）

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

教員が充当できそれぞれが教育における役割を遂行できている。また、実習施設を中心に研究のフィールドを得ることもできるようになり、フィールドの実践者との連携をもちながら研究を進めることが可能な状況にきているが、研究の紙上発表が少ないことや研究費の獲得状況が少ない状況にある。努力が必要であると考えている。

現状の問題点及びその対応策

老年看護学分野の臨地実習は、3年生後期（2単位）と4年生前期（2単位）を実施しているため、実習指導に1年間を通して対応している状況である。このことはとくに助手が研究に使用できる時間が少ないことにつながり、論文作成ができない状況になっている。

対策としては、4年前期の実習施設を増やし、同時期に実習可能な学生数を増やすことで、期間を多少ではあるが縮小したいと考えている。

今後の展望

高齢者を抱える家族や高齢者自身、高齢者をケアする医療や福祉関係者など、ケア方法を習得したいというニーズに対応することや、介護に疲労困憊している家族の相談窓口などを設けるなど、地域と密接に関わることの必要性を感じており、これらの視点での研究も進めていきたい。

〔地域・精神看護学講座〕

(1) 地域看護学分野

1. 研究の概要

当分野における基礎的、専門的研究はいずれも保健医療の分野である地域保健、産業保健、在宅看護、学校保健などの現場に立脚しているものであり、その成果は現場の活動に還元されるものが多い。また、これらの研究は、広く公衆衛生学及び看護学の内容とその研究手法に基づいて行われているものである。研究のテーマは、小児、青年、成人、高齢者など各年代にわたる人々を対象にしたものであり、例えば、少子高齢化の地域における育児に関する母親の自助グループや高齢者の健康増進に関する地域サポートシステム構築の過程や評価に関する研究などは、地域の特性に対応した公衆衛生看護学の理念に基づいた実践的な研究である。また、産業保健における健康管理に関する研究では、成人を中心とした年代における健康増進、健康障害予防など疫学的手法を用いた研究である。さらに、訪問看護における看護職の現状をリスクマネジメントの視点から行う研究は、訪問看護という新たな地域看護学分野における研究分野でもある。

このように、地域看護学分野における研究は、あらゆる年代の人々を対象とした、健康増進、健康づくり、病気の予防と早期発見・早期治療、社会復帰といった多様な分野における研究がなされており、今後もある有益な実践的な研究活動を目指す。

＜主な研究テーマ＞

1) 職域における健康管理に関する研究

化学物質による健康障害予防対策、化学物質以外の職業性疾病の予防対策、作業関連疾患等の予防対策の課題に取り組んでいる。

2) 地域高齢者の閉じこもり予防に関する研究

高齢者はQOLの低下や環境条件などに伴い閉じこもり傾向がみられ、その結果介護を必要とする状態になるような場合も多い。地域における高齢者の閉じこもり予防のための支援策の実施とその有用性の検証を行っている。

3) 保健師の活動や配置に関する研究

主に市町村の保健師の役割と機能について、行政や社会の変化と対応してどのような現状であるか、どのような役割や機能が期待されているか、適正な保健師の配置はどのようなものかといった研究を行っている。

4) 訪問看護ステーションにおけるリスクマネジメント

訪問看護ステーションの看護職のリスクの現状と対処に関する研究を行い、訪問看護の質の向上に寄与することを目指して研究している。

2. 名簿

教授：	後閑容子	Yoko Gokan
教授：	柳澤尚代	Hisayo Yanagisawa
教授：	牧野茂徳	Shigenori Makino
助教授：	石原多佳子	Takako Ishihara
助手：	玉置真理子	Mariko Tamaoki
助手：	若杉里実	Satomi Wakasugi

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 後閑容子編著. 図でわかるエビデンスに基づく高齢者の看護ケア, 東京: 中央法規出版; 2003年.
- 2) 後閑容子訳. エビデンスに基づいた教育の推進: 杉森みどり監訳. エビデンスに基づく看護学教育, 東京: 医学書院; 2003年: 1-18.
- 3) 後閑容子, 蝦名美智子, 大西和子編著. 健康科学概論第3版, 東京: ヌーベルヒロカワ; 2003年: 4-17, 28-44, 270-271.
- 4) 後閑容子. 市町村における地域看護活動: 真船拓子, 杉本正子編. ナースのための地域看護学概論第3版, 東京: ヌーベルヒロカワ; 2004年, 148-164.
- 5) 荒賀直子, 後閑容子編著. 地域看護学. JP, 東京: インターメディカル; 2004年.
- 6) 石原多佳子. 障害者(児)の保健活動, 歯科保健活動: 荒賀直子, 後閑容子編. 地域看護学. JP, 東京: インターメディカル; 2004年: 288-302, 337-344.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

なし

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 小野廣紀, 栢下淳, 青山武史, 青木良光, 松宮良子, 武藤吉徳, 杉浦浩子, 石原多佳子, 牧野茂徳, 山田光子, 後閑容子, 伊藤孝治, 若林和夫, 轟伊佐雄. 岐阜大学学生の食生活調査, 岐阜市立女子短期大学研究紀要 2003年; 52巻: 127-133.
- 2) 杉本正子, 高石純子, 川越博美, 後閑容子, 春山早苗, 石田千絵, 河原加代子. 病院と在宅におけるがん終末期患者のQOL, 東京保健科学会誌 2003年; 6巻: 26-37.
- 3) 橋本希, 中澤あゆ美, 田沼希美, 田中幸恵, 後閑容子, 渡邊容子. 児童虐待事例報告の経年的比較調査, 臨床看護 2003年; 29巻: 2255-2264.
- 4) 牧野茂徳. 平成14年有所見率調査結果, 東京さんぽ 21 2003年; 17号: 2-7.
- 5) 石原多佳子, 水野かがみ, 吉澤洋子, 後閑容子. 外出頻度の少ない山間地域在宅高齢者支援の検討, 日本地域看護学会誌 2004年; 7巻: 62-67.
- 6) 香川由美子, 石原多佳子. 介護福祉学生の卒業時点における倫理意識の検討—短期大学2年課程の学生への調査より—, 日本看護福祉学会誌 2004年; 9巻: 33-42.
- 7) 石原多佳子, 香川由美子, 真野啓子, 佐分行子. 基礎資格の相違から見た介護支援専門員の現状と課題, 日本介護福祉学会誌 2004年; 11巻: 84-91.
- 8) 牧野茂徳. 平成15年有所見率調査結果, 東京さんぽ 21 2004年; 21号: 2-5.
- 9) 牧野茂徳, 渡辺新吉, 奈良一郎, 森正三, 加藤輝夫, 新村耕造, 鈴木忠能, 武藤岳志, 山本義昭, 林部弘. 定期健康診断有所見率調査結果について, 産業医学ジャーナル 2004年; 27巻: 58-64.
- 10) 中野照代, 藤生君江, 鈴木知代, 入江晶子, 仲村秀子, 安富真理, 願寿智, 鈴木みちえ, 後閑容子, 鈴木三平, 任輝, 謝小燕, 張新宇. 看護学生と教育学部学生の健康習慣・健康観の比較研究, 聖隷クリストファー大学看護学部紀要 2005年; 13巻: 91-104.
- 11) 柳澤尚代, 長江弘子, 斉藤夕子, 氏家亜幸子, 山口佳子, 池田裕子, 藤田智子, 千葉圭子. 保健師記録改善の実践例から学ぶ, 保健師ジャーナル 2005年; 61巻: 498-499.
- 12) 柳澤尚代. 自主勉強会による記録の見直しとスキルアップのプロセス, 保健師ジャーナル 2005年; 61巻: 505-506.
- 13) 柳澤尚代. 時代の流れに即した記録の改善が業務の効率化に貢献, 保健師ジャーナル 2005年; 61巻: 513-514.
- 14) 柳澤尚代. 記録改善によって広がる可能性, 保健師ジャーナル 2005年; 61巻: 515.
- 15) 若杉里実, 坂本真理子, 錦織正子. 自主交流会で「語り」がもたらした効果, 保健師ジャーナル 2005年; 61巻: 1084-1088.
- 16) 牧野茂徳. 平成16年度有所見率調査結果, 東京さんぽ 21 2005年; 第25号: 2-6.

原著 (欧文)

- 1) Furuzawa H, Sakakibara C, Ishihara T, Miyata N. Active involvement of senior citizens in society and related factors. The Journal of Education and Health science. 2003;51:436-444.
- 2) Watanabe Y, Onjoji Y, Ishida Y, Gokan Y. English for Nursing. JASET-SIG on ESP. 2004;6:57-61.
- 3) Makino S, Iwata H. Studies on prevention against disorders due to harmful chemical substances in the workplace. Acta Ach Med Univ Gifu. 2005;53:15-22.

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者: 石原多佳子, 研究分担者: 折居忠夫, 水野かがみ, 野口典子, 壬生尚美, 田久浩志; 科学研究費補助金基盤研究(C)(2): 地域高齢者の閉じこもり予防に関する研究; 平成14-16年度; 2,100千円(1,200千円: 500千円: 400千円)
- 2) 研究代表者: 渡邊容子, 研究分担者: 園城寺康子, 石田洋子, 後閑容子, 佐々木かほる, 林陸郎; 科学研究費補助金基盤研究(C)(2): 日英比較ジャンル分析, 看護学研究論文にみる日本人のレトリック; 平成14-16年度; 3,600千円(1,800千円: 800千円: 1,000千円)
- 3) 研究代表者: 後閑容子, 研究分担者: 石原多佳子; 科学研究費補助金萌芽研究: 行政変革に伴う保健師の役割移行に関する研究—transition理論を用いて—; 平成16-17年度; 2,800千円(1,500千円: 1,300千円)
- 4) 研究代表者: 猫塚クニエ, 研究分担者: 鈴木ミドリ, 荒賀直子, 山口忍, 沖寿子, 国分恵子, 石原多

佳子；平成 16 年度全国保健師長会長調査研究事業一保健所における実習受け入れの評価と今後のあり方一；平成 16 年度；1,500 千円

- 5) 研究代表者：佐々木峰子，研究分担者：吾郷美奈恵，飯田芳枝，梅林圭子，後閑容子，鈴木るり子，名原寿子，山崎京子；平成 16 年度全国保健師長会調査研究事業一市町村での効果的な保健活動を推進するための保健師の適正配置に関する研究；平成 16 年度；1,500 千円

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

後閑容子：

- 1) 民族衛生学会評議員(～現在)

牧野茂徳：

- 1) 日本産業衛生学会代議員(～現在)
2) 日本産業衛生学会東海地方会理事(～現在)
3) 日本衛生学会評議員(～現在)
4) 日本民族衛生学会評議員(～現在)
5) 日本公衆衛生学会評議員(～平成 17 年 6 月)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

後閑容子：

- 1) NPO 在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワーク第 9 回全国の集い(平成 15 年 9 月，岐阜，「地域での連携を考える」座長)
2) 第 27 回全国地域保健師学術研究会(平成 17 年 10 月，岐阜，ワークショップ「保健師の力量アップを目指して」座長)

石原多佳子：

- 1) 第 27 回全国地域保健師学術研究会(平成 17 年 10 月，岐阜，ワークショップ「科学的根拠に基づいた生活習慣病予防のためのアプローチ」座長)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

後閑容子：

- 1) 全国保健師教育機関協議会副会長(平成 16 年度～現在)

牧野茂徳：

- 1) 「ヘルスプランぎふ 21」推進会議地域・職域保健連携推進部会委員(平成 16 年度～現在)

- 2) 岐阜県健康障害半減推進企業登録審査会委員(平成 16 年度～現在)

石原多佳子：

- 1) 日本社会福祉士会 社会福祉士養成支援委員会作業部会委員(平成 16 年度～現在)
- 2) 岐阜県立陽光園運営委員(平成 17 年度)

若杉里実：

- 1) 名古屋市介護認定審査会委員(平成 16 年度)

10. 報告書

- 1) 牧野茂徳, 岩田弘敏, 藤田節也, 若林和夫, 後閑容子, 石原多佳子, 山田光子：岐阜県内の事業所における有害化学物質による障害予防対策の実態：平成 14 年度産業保健調査研究報告書（労働福祉事業団岐阜産業保健推進センター）：1-29(2003 年 3 月)
- 2) 折居忠夫, 石原多佳子, 水野かがみ, 野口典子, 壬生尚美, 田久浩志：地域高齢者の介護（閉じこもり）予防と生活支援に関する研究：平成 16 年度中部学院大学総合研究センター共同研究事業 分担報告書：11-43, 61-73, 88-92(2004 年 3 月)
- 3) 渡邊容子, 園城寺康子, 石田洋子, 後閑容子, 佐々木かほる, 林陸郎：日栄比較ジャンル分析, 看護学論文にみる日本人のレトリック：平成 16 年度文部科学省科学研究費補助金 分担報告書：30-53(2005 年 3 月)
- 4) 佐々木峯子, 吾郷美奈恵, 飯田芳枝, 梅林圭子, 後閑容子, 鈴木るり子, 名原壽子, 山崎京子：市町村での効果的な保健活動を推進するための保健師の適正配置に関する研究：厚生労働省科学研究費平成 16 年度地域保健総合推進事業 分担報告書：39-43, 67-69(2005 年 3 月)
- 5) 吉本照子, 波川京子, 柳澤尚代, 阿部芳江, 酒井郁子, 杉田由加里, 前川厚子, 疋田理津子, 森下浩子：在宅高齢者の生活意欲と日常生活行動に配食ボランティアサービスの利用が及ぼす影響：平成 16 年度文部科学省科学研究費補助金 分担報告書：27-40(2005 年 5 月)
- 6) 石原多佳子, 折居忠夫, 水野かがみ, 野口典子, 壬生尚美, 田久浩志：地域高齢者の閉じこもり予防と生活支援に関する研究：平成 16 年度文部科学省科学研究費補助金 総括・分担報告書：1-43, 59-75, 88-92(2005 年 3 月)
- 7) 猫塚クニエ, 鈴木ミドリ, 荒賀直子, 山口忍, 沖寿子, 国分恵子, 石原多佳子：保健所における実習受け入れの評価と今後のあり方：平成 16 年度全国保健師長会長調査研究事業 分担報告書：9-13(2005 年 3 月)

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

当分野の教員は赴任後それほど年数が経過していないこともあり、個々の専門性が尊重された。

現状の問題点及びその対応策

当分野における教員は、産業と地域保健分野を専門としている。それぞれの専門に基づいた研究を行っている現状であるが、今後は、各々の専門性を活かした共通のテーマでの研究を行うような新しいプロジェクトを構築していく必要がある。また、地域の保健師との共同研究をさらに推進し、研究のフィールドの確保と大学院生の研究活動の指導、支援が求められる。

今後の展望

今後、産業保健、地域保健における多様な健康問題に対応した幅広く、かつ専門性をもった研究や、保健師などの専門職との協働による研究の推進を通して、地域に貢献していくことがあげられる。

さらに、大学院生の研究指導を通して、看護職が実践の場で研究を実施し、活用できるような支援を行うことも期待されていることであると考えている。

(2) 精神看護学分野

1. 研究の概要

精神看護学は、社会におけるメンタルヘルスにおける諸問題および個々の健康障害を持つ人々に対する看護アプローチの方法を探究する分野であると考えている。こころの働きと日常生活との関連に焦点を当てた精神看護の視点から、こころの健康、健康障害について考察するとともに、心身を病む人々への精神看護学の概念モデルおよび方法論、技術論の実証的な研究を目指している。また、地域におけるメンタルヘルスケアシステムの検討、ノーマライゼーションの理念の元に精神障害者の理解の促進、および精神障害者へのサポートに関する検討を行っていくことを研究分野としている。

<主な研究テーマ>

1) 精神科デイケア・作業所に通所中の精神障害者の現状に関する研究

ノーマライゼーションの理念の元、多くの精神障害者が社会生活を送っている。面接という方法によって、彼らの社会生活の実情とその体験を理解し、看護師の支援のあり方を検討している。平成17年は学生とともに、精神科デイケアの喫茶作業と料理教室に参加している精神障害者の面接を行い、社会生活の体験の中から、そのプログラムの効果について検討した。

2) 精神障害者の回復過程における治療的なかかわりに関する研究

精神科病院に入院している患者に対し、治療的な環境としてどのような看護師のかかわりが必要か検討している。急性期から慢性期のあらゆる病期の精神障害の体験世界について、生活の実態と彼らの現実認識とのずれから、病の影響を検証し、そこでの関わりの意味を明確にしていく課題に取り組んでいる。

3) 精神障害者の家族支援に関する研究

精神疾患患者の家族は、疾患の理解の難しさや見通しのなさ、対応の難しさ、周囲の偏見などに苦悩し、なにがしかの支援を求めている。患者と家族の相互作用や家族機能に注目し、看護職としてできる家族支援のあり方を探求している。

4) 患者－学生のコミュニケーションの分析に関する研究

コミュニケーションは精神看護を行う上で非常に重要な看護技術の一つである。しかし、学生は、学生自身の特性や患者の状況、周囲の環境など、さまざまな要因によって、コミュニケーションにつまづきを感じる。どのような要因によって、どのような影響を受けるのかについて、多方面から検討を行っている。

5) 精神科デイケアの通所初期段階における利用継続要因に関する研究

精神障害者の治療基盤が、「精神科病院から地域へ」という流れがつけられ、退院後に精神科デイケアで行われる治療的アプローチが益々重要となってきた。デイケア継続に影響する要因を明確にしていくことによって、継続を決定づける時期のアプローチを確立していく課題に取り組んでいる。

2. 名簿

助教授：	奥村太志	Hutoshi Okumura
講師：	杉浦浩子	Hiroko Sugiura
助手：	三品弘司	Hiroshi Mishina

3. 研究成果の発表

著書（和文）

なし

著書（欧文）

なし

総説（和文）

なし

総説（欧文）

なし

原著（和文）

- 1) 杉浦春雄, 杉浦浩子, 西田弘之. レクリエーション活動前後の気分プロフィール (POMS) の変化について, 岐阜薬大基礎教養系紀要 2004年; 15号: 17-33.
- 2) 奥村太志, 河合洋子, 渋谷菜穂子, 石井文康, 山田浩雅, 加藤雄一. 統合失調症者の障害認識・受容と社会復帰後の生活についての検討, 名古屋市立大学紀要 2005年; 5巻: 1-10.
- 3) 奥村太志, 渋谷菜穂子. 統合失調症患者の「長期入院に関する」認識, 日本看護医療学会雑誌 2005年;

7 卷 : 34-43.

- 4) 杉浦春雄, 杉浦浩子, 西田弘之, 岡崎敏郎, 井上真人. 一過性のレクリエーション活動が気分プロフィール (POMS) に及ぼす影響, 日本健康医学会雑誌, 2005 年 ; 13 卷 : 21-27.

原著 (欧文)
なし

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

なし

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

なし

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

なし

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

当分野は, 教員の退職や新たな教員の着任など人員交替があったため, 教育・実習体制を整えていくことが優先された。そのため, 研究活動や社会活動が十分には行えない状況であり, 成果をあげることができなかった。しかし, 実践的研究に向けて研究フィールドの確保などを行い, 研究基盤は整いつつある。

現状の問題点及びその対応策

- 1) 人員が少ないため, 研究の遂行には臨床や他教育機関との連携, 協力が望ましい。しかし, 現段階

では連携，協力の体制が整っていないため，体制作りを行っていきたい。

2) 半年間にわたる看護学実習があるため，研究時間の確保が難しい。教員間での協力体制を整え，研究時間の確保と研究の効率化を図りたい。

今後の展望

日本精神科看護技術協会や他大学と連携し，精神看護学の教育・研究・看護実践についての研究会を発足させていく予定である。精神看護における教育や臨床の問題や課題について，多角的に検討していくことにより，実践的な研究につなげていくことを目的としていく。